

合 計	私 設		官 設	
	私 設	官 設	私 設	官 設
	森本倉庫株式會社 私設 置場	市内磯上通二丁目	493	52
	東神倉庫株式會社 私設 置場	市内濱邊通七丁目	24	3
	三菱倉庫株式會社 私設 置場	市内川崎町一丁目	3	3
	日本製米製粉株式會社 私設 置場	市内今出在家町三丁目	3	3
	住友倉庫株式會社 私設 置場	市内東出町三丁目	26	3
	合資會社日本蠟燭製造所 私設 置場	市内大道町一丁目	3	3
	ライジンケサン石油 株式會社私設置場	市内浪松町八丁目	2,110	2,177
	臺灣製糖株式會社 私設 置場	兵庫縣川邊郡小田村 杭瀬字午新田	3,384	3,477
	帝國染料株式會社 私設 置場	兵庫縣武庫郡鳴尾字大東	1,081	659
	森永製菓株式會社 私設 置場	兵庫縣川邊郡園田村御園字 西ノ町	1	435
	森安三郎 私設 置場	兵庫縣尼ヶ崎市大物村西開	1	38
合 計			8,663	10,034
			7,743	8,884
			1,110	1,110
			(十)	(十)
			1,067	1,067
			(十)	(十)
			1,067	1,067

前記假置場内に大正十四年中移入せし貨物の總額は千六拾八萬百九拾五圓此の噸數十二萬一千七百八十八噸にして、此の内外國貨物八百六拾萬七千七百八圓内國貨物二百七萬二千四百八拾七圓なり。移出に係る貨物の總額は千六百八拾八萬七千八百拾四圓此の噸數九萬八千四百九十四噸にして、其の内譯は積戻貨物百七拾參萬七百六拾九圓輸入貨物七百七拾五萬七千六百八拾壹圓其他の移出貨物七拾貳萬貳千參百貳拾壹圓移出内國貨物百四拾七萬七千四拾參圓なり。

之を前年に比較するに、移入價額參拾七萬七千七百參拾參圓及移出價額參百八拾萬千四百拾七圓の減少を來せり。尙本年中に於ける假置場利用狀況を示せば左表の如し。

品 名 區 別	移 入		移 出	
	外國貨物	内國貨物	外國貨物	内國貨物
穀物及種子	172,305	35,033	21,388	1,344
飲食	67,083	61,326	9,496	2,895
皮毛骨角類及同製品	6,141	—	—	—
油脂蠟及同製品	6,452	2,662	1,370	—
其他	—	—	—	—
合計	184,981	96,661	32,254	4,243

通計	種別	移入		移出	
		額	價	額	價
合計		二〇、六八〇、一九五		一一、六八七、八二四	
内譯計	外國貨物	八、六〇七、七〇八		一、七〇三、七六九	
	内國貨物	二、〇七三、四八七		七、七五七、六八一	
	積戻貨物			七、七五七、六八一	
	輸入貨物			七、七五七、六八一	
	他ノ移出貨物			七、七五七、六八一	
	移出内國貨物			七、七五七、六八一	
	雜品	二九、〇四四		五、九一三	
	藥劑化學及製	八、二七九		一、三八八	
	染料顏料及塗	七、三三八		一、〇九八	
	絲綢繩索及同	二、六〇〇		二、八〇三	
	布帛及同製品	五、六六一		三、四二二	
	衣類及同附屬	九、三〇三		三、四二二	
	紙及同製品書	二、四〇〇		六三〇	
	礦物及同製品	三、一一一		一、六三三	
陶磁器及硝子	一、八		一、六三三		
鑛及金屬	五、〇九三		二、九〇六		
金銀製品	二、四八七		二、九〇六		
時計學術器及	三、六八三		二、九〇六		
機械類	二、九七三		二、九〇六		

假置場移出入貨物月別噸數表 (既往兩年對比)

月別	區別	大正十三年		大正十四年	
		移入	移出	移入	移出
計		一五九、四六七	二二、七六八	(一) 三、七六九	(一) 三、四四〇
一	月	八、三二六	八、四三六	(一) 二、〇〇〇	(一) 二、四〇〇
二	月	二二、二五五	一〇、五〇五	(一) 二、七五〇	(一) 三、二九九
三	月	三三、九六六	二二、六四七	(一) 一〇、三〇〇	(一) 一、六七五
四	月	八、七二四	一〇、二八九	(一) 一、五七三	(一) 一、六七五
五	月	一〇、五五三	一〇、八〇九	(一) 二、四四三	(一) 三、七四七
六	月	一九、六六九	八、九二六	(一) 一〇、七四三	(一) 二、二六九
七	月	二一、四六九	二、四二五	(一) 五、四四	(一) 二、三三三
八	月	七、九六八	八、一〇一	(一) 一、三三	(一) 七、九五九
九	月	九、四一六	八、七八七	(一) 六、二九九	(一) 六、四四四
十	月	二二、八七八	一〇、二四九	(一) 二、六二九	(一) 一、六四四
十一	月	二二、一〇九	一三、五二一	(一) 一、三〇三	(一) 三、〇四三
十二	月	一三、〇四四	八、二三四	(一) 四、九二〇	(一) 三、〇四三

大正七年以降の當港及附近所在の假置場移出入貨物の價額を表示せば次の如し。

年次	區別	移入		移出	
		外國貨物	内國貨物	積戻貨物	其他
計		移入	計	移出	計

大正	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
七, 五〇, 五九	七, 一〇, 七〇	四九, 三三, 一六	二, 六〇, 三〇	二〇, 九三, 五〇	九, 〇〇, 五三	九, 八八, 七七	八, 六七, 七八	七, 五〇, 五九
三三, 六五	二, 六五, 八七	三, 四九, 七二	一, 三九, 〇三	六〇, 九五, 五二	九, 五三, 七五	一, 六九, 二二	二, 〇七, 四八	三三, 六五
七, 八四, 一四	二, 六五, 八七	三, 四九, 七二	一, 三九, 〇三	六〇, 九五, 五二	九, 五三, 七五	一, 六九, 二二	二, 〇七, 四八	七, 八四, 一四
一, 〇〇三, 二五	六, 二〇, 七二	四, 七三, 八六	三, 五三, 九六	一, 四三, 九〇	一, 八四, 七五	一, 六六, 六一	七, 三三, 三二	一, 〇〇三, 二五
七, 五四, 七七	一, 四〇, 九二	二, 〇三, 四七	一, 一六, 五〇	九, 四三, 八三	一, 二六, 七四	八〇, 二五, 四九	一, 四七, 〇四	七, 五四, 七七
七, 八七, 二八	一, 四〇, 九二	二, 〇三, 四七	一, 一六, 五〇	九, 四三, 八三	一, 二六, 七四	八〇, 二五, 四九	一, 四七, 〇四	七, 八七, 二八

第五節 上屋及出入貨物

當港及附近にある上屋の大正十四年末に於ける總坪數は、官設三萬七千九百八十八坪、私設四萬三百八十坪にして、合計七萬八千三百六十八坪なり。之を前年に對比するに輸入上屋二箇所、輸出上屋一箇所を減少せしむ坪數に於ては三千九百九十八坪の増加を來せり。但し本節に記載する上屋は保稅地域内に在る上屋を指すものにして、之を細別すれば左表の如し。

品別	名	稱	所	在	地	坪	數
築	港(輸入上屋)	神戸税關築港構内	大正十三年	大正十四年	(増)	(減)	
			二〇, 六三	二〇, 三三	(一)	三〇	

官	設	私	計	市	内	町	目	坪	數
第一波止場	第一波止場	三菱倉庫株式會社神戸支店(輸入上屋)	三, 八五〇	東川崎町一丁目	一四, 七四	一八〇, 九七	(十)	三, 三五	
第二波止場	第二波止場	東神倉庫株式會社神戸支店	八, 八六三	濱邊町八丁目	八, 八三	(一)	四〇		
川崎波止場	川崎波止場	株式會社鈴木商店	一, 四九七	濱脇町三丁目	三〇	(一)	一, 二七		
兵庫波止場	兵庫波止場	川西倉庫株式會社	三, 五三	東尻池町字大竹濱	五, 二九	(十)	四, 八〇		
神戸驛出張所	神戸驛出張所	ヘルム兄弟商會	二〇〇	明邊通三丁目	二〇〇	(十)	四		
築港(輸出上屋)	築港(輸出上屋)	臺灣製糖株式會社神戸支店	八〇〇	東尻池町六丁目	八〇〇	(一)	一〇		
第二波止場	第二波止場	住友倉庫株式會社神戸支店	一, 五八	東出町二丁目	一, 五八	(一)	一〇		
神戶驛出張所	神戶驛出張所	森本倉庫株式會社	一, 〇七六	濱邊通二丁目	一, 〇七六	(十)	四		
收容藏置所	收容藏置所		三, 一八〇	神戶税關第一波止場構内	三, 一八〇	(一)	四, 五八		
第二波止場	第二波止場		三, 三〇	神戶驛構内	三, 三〇	(十)	五, 二四		
築港(輸出上屋)	築港(輸出上屋)		一〇〇	神戶税關第一波止場構内	一〇〇	(一)	七六		
第一波止場	第一波止場		二, 四三三	第一波止場構内	二, 四三三	(一)	四, 三五		
第二波止場	第二波止場		八, 〇〇八	第二波止場構内	八, 〇〇八	(十)	二, 八		
川崎波止場	川崎波止場		二〇〇	川崎波止場構内	二〇〇	(一)	二, 八		
兵庫波止場	兵庫波止場		五三七	兵庫波止場構内	五三七	(十)	七六		
神戸驛出張所	神戸驛出張所		一〇〇	神戸驛構内	一〇〇	(一)	五, 二四		
第二波止場	第二波止場		三, 三〇	神戸驛構内	三, 三〇	(一)	二, 一五		
神戶驛出張所	神戶驛出張所		三, 一八〇	神戶税關第一波止場構内	三, 一八〇	(一)	四, 五八		
收容藏置所	收容藏置所		三, 一八〇	神戶税關第一波止場構内	三, 一八〇	(一)	四, 五八		

神戸港大観

設	計			計	計	計	計
	内	外	計				
ニッケルエンドライオンス商會(同)	同	南本町一丁目	一、〇一八				(一)
三菱造船株式會社造船所(同)	同	和田崎町	五七六				(一)
株式會社川崎造船所(同)	同	東川崎町	一、九九五				(一)
明治製糖株式會社(同)	同	東尻池町四九二	九三三				(一)
紐育スタンダード石油會社(同)	同	兵庫縣武庫郡魚崎町横屋	二、八六一				(一)
三菱倉庫株式會社神戸支店(輸出上屋)	同	市内東川崎町一丁目	六〇〇				(一)
東神倉庫株式會社神戸支店(同)	同	加納町六丁目	二〇〇				(一)
合計	三、八六四	四〇、三六〇	(十) 四、五二六				
合計	七、三七〇	七八、三三八	三、九九八				

前記上屋内外に大正十四年中搬入したる輸出入貨物噸量は二百六十萬九千六百四十噸にして、搬出に係るもの二百六十六萬五千八百噸、其搬出入總計五百二十七萬四千七百四十八噸にして、前年に比し搬入に於て二十八萬五千五百八十二噸減量し、搬出に於て三十八萬九千三百三十九噸減少せり。尙本年中上屋内外に搬入出したる貨物噸量を細別すれば次表の如し。

搬入	區別		搬入	搬入	搬入	搬入	搬入
	内	外					
一、六二八、七三三	四、六六六	一、六七四、五三七	一、六二八、七三三	四、六六六	一、六七四、五三七	一、六二八、七三三	一、六二八、七三三

輸出入合計	輸出貨物				輸入貨物			
	搬出			搬入	搬出			搬入
	搬出	搬出	搬出		搬出	搬出	搬出	
搬出入合計	搬出	搬出	搬出	搬入	搬出	搬出	搬出	搬入
四、五五四、一五二	二、二六二、五三三	二、二九二、六一九	二、二六二、六一九	六三三、八〇一	積入	積入	積入	一、四八六、九四二
六、九九〇、〇九三	三、四八、一〇八	三、五〇、九八四	三、五〇、九八四	三〇二、四〇三	積入	積入	積入	三、七四三
五、二五三、二四三	二、六〇九、六四〇	二、六四三、六〇三	二、六四三、六〇三	九三五、二八三	積入	積入	積入	二、一〇八四
一八、三三三	一、八、三三三	一、八、三三三	一、八、三三三	一〇六	積入	積入	積入	三〇、二〇〇
三、一九三	三、一九三	三、一九三	三、一九三	一〇七	積入	積入	積入	二、七、七五五
二、五〇五	二、五〇五	二、五〇五	二、五〇五	一〇七	積入	積入	積入	二、二、六九九
五、二七四、七四八	二、六〇九、六四〇	二、六六五、一〇八	二、六六五、一〇八	九三五、二八三	積入	積入	積入	二、二、六九九

大正十一年以降の搬入出貨物噸量を示せば次の如し。

年次	區別		計
	搬入	搬出	
大正十一年	二、七八七、九五三	二、八一二、四〇三	五、六〇〇、三五六
大正十二年	二、九〇〇、五八〇	二、九〇四、五四三	五、八〇五、一三三
大正十三年	二、八九五、二二二	三、〇五四、二四七	五、九四九、四六九
大正十四年	二、六〇九、六四〇	二、六六五、一〇八	五、二七四、七四八

次に保税地域内岸壁より揚卸せし貨物噸量は左表の如し。

台	計	平	卸	扱	2,039	300,530	24,1
(官私設)		解	扱	計	4,502	1,342,705	1,678.5
					-	2,323,103	1,703.1

0123456789101112345

貨物積卸成績表 (保税地域内岸壁ニ於ケル)

場 所 別	區 分	大 正 十 一 年				大 正 十 二 年				大 正 十 三 年				大 正 十 四 年					
		延 長	揚 卸	計 卸	間 常 積 卸	延 長	揚 卸	計 卸	間 常 積 卸	延 長	揚 卸	計 卸	間 常 積 卸	延 長	揚 卸	計 卸	間 常 積 卸		
官	第一突堤 (水深30呎)	215	90,991	6,304	91,633	215	84,535	8,074	92,610	215	97,764	8,755	106,539	215	57,061	10,767	67,828	315.4	
	第二突堤東半	215	6,304	54,478	60,784	215	2,132	45,183	47,315	215	4,132	65,302	69,494	215	1,697	21,551	23,448	107.1	
	第二突堤西半	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	(水深30呎)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
官	第三突堤 (水深同上)	400	18,110	2,344	18,445	400	179,172	5,954	185,126	400	175,100	10,497	185,597	400	105,760	12,553	118,313	295.8	
	第四突堤 (水深同上)	456	7,602	114,813	122,475	456	15,894	107,145	123,039	456	7,559	104,441	112,000	456	963	48,097	49,040	101.0	
	第一物揚場	140	99,049	59,683	159,532	145	87,094	67,254	154,348	145	89,537	77,480	167,017	145	73,101	7,634	149,785	1,033.0	
	第二物揚場	90	18,089	10,714	28,803	90	1,331	6,022	7,353	90	9,854	35,588	45,422	90	16,887	24,654	41,523	244.3	
私	第一波止場	241	211,488	82,352	293,840	241	224,764	76,700	301,464	241	191,354	82,756	274,112	241	154,945	57,810	212,755	882.8	
	第二波止場	277	113,500	670,829	784,329	277	85,733	644,816	733,549	277	191,156	661,272	680,428	277	17,897	656,114	674,011	2,433.3	
	川崎波止場	275	103,915	83,580	189,445	275	96,942	99,190	196,132	275	111,001	59,315	170,316	275	31,023	28,031	56,054	203.9	
	兵庫波止場	30	7,632	6,927	14,457	30	1,268	108	1,376	30	2,139	204	2,343	30	292,306	292,348	584,654	19,488.5	
私	第一突堤	20	2,296	639	2,949	20	424	1,327	1,751	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	第二突堤	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	第三突堤	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	第四突堤	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
高 濱 岸 壁 (水深二十七呎)	本 船 報	245	106,993	350	107,343	245	133,824	1,200	135,024	245	93,801	—	93,801	245	130,417	60,195	190,612	778.0	
	本 船 計	347	156,437	122,726	279,163	347	118,104	205,435	324,739	347	81,362	201,349	282,731	347	154,309	121,747	276,056	795.5	
川 崎 岸 壁 (水深同上)	本 船 報	170	209,485	996	210,481	170	186,934	55	186,989	170	201,000	70	201,070	170	137,213	288	137,501	826.8	
	本 船 計	235	81,639	69,343	150,970	235	82,474	111,816	194,290	235	70,320	99,479	169,799	235	144,521	83,699	228,220	971.1	
小 計	本 船 報	1,424	613,545	21,410	654,955	1,424	626,016	36,912	662,928	1,424	640,968	44,768	685,636	1,424	328,574	56,409	384,983	270.4	
	本 船 計	2,717	701,102	137,363	838,465	2,717	644,927	1,244,871	1,889,734	2,697	526,010	1,311,067	1,637,077	2,777	670,337	1,269,011	1,939,348	698.4	
合 計 (官 私 設)	本 船 報	2,039	980,398	24,727	1,005,125	2,039	965,133	38,167	1,003,300	2,039	961,689	44,831	1,006,527	2,039	654,525	116,892	771,417	373.3	
	本 船 計	4,502	1,342,705	157,839	1,500,544	4,718	1,388,768	1,798,921	2,197,699	4,415	1,150,418	1,841,368	2,991,786	4,172	1,404,770	1,728,903	3,133,673	751.3	

第八章 陸運の概況

第一節 汽車

(1) 旅・客 大正十四年中の當市各驛乗降客總數は、一千八百九十四萬八千五百七十三人にして、内乗客は九百五十八萬七千四百三十八人、降客九百三十六萬一千百三十五人なり。之を一日に平均すれば、乗客二萬六千二百六十七人、降客二萬五千六百四十七人、合計五萬一千九百十四人を吞吐せるの割合にして、前年と比較して乗客に於て、十五萬七千四百四人、降客に於て十八萬八十七人を増し一日平均乗客五百二人、降客五百六十二人、計一千六十四人を増加せり。斯く逐年の増加は、地方文化發達の程度に反映するものと見らるゝを以て、當市民の活動發展を察知し得べし。之を各驛に就て見るに、三宮驛最も多く、乗降總數の二割九分を占め、神戸驛之に次で二割一分となり、兵庫驛は一割九分に當れり。灘驛の他驛よりも比較的割合高く、一割五分に相當せるは、近來本市近郊の發展頗る顯著なるものあるによる。反之鐘紡前驛及和田岬驛の著しき減數は、神戸市電開通の結果運轉回數を減じたる影響による。表示すれば次の如し。

大正十三年 神戸市内各驛乗降客調表
大正十四年

驛名	乗客		降客		乗降客合計	
	十三年	十四年	十三年	十四年	十三年	十四年
三宮	二,九三,五〇九	二,八三七,四〇三	二,八〇六,〇二七	五,七一九,五三六	五,五五三,五九三	五,五五三,五九三
神戶	一,八七〇,九四三	二,〇三八,三三三	一,〇一一,〇一一	三,〇七四,三三三	三,〇七四,三三三	三,〇七四,三三三
兵庫	一,八二一,〇六九	一,九一〇,五五八	一,八六六,六八九	三,六七三,二八三	三,五七六,二八三	三,五七六,二八三
灘	一,三三八,七八九	一,四六八,三六六	一,三三〇,一五二	二,八〇〇,九四八	二,九〇〇,八七四	二,九〇〇,八七四
須磨	五七〇,〇二九	六二六,二五七	五五五,六二二	一,一三二,四二四	一,一三二,四二四	一,一三二,四二四
和田	四八三,三〇六	二九一,五五五	四六八,〇三五	七五三,六六七	九五一,三三三	九五一,三三三
鷹取	四一四,一九七	五三三,四〇二	四一三,三三八	七五三,四一三	八二七,五八五	八二七,五八五
鐘紡	二八一九三	一一,〇六六	一〇,〇四五	六,五四〇	八二七,五八五	一,〇九九,八一五
計	九,四三〇,〇三四	九,五七四,四三八	九,一八一,〇四八	九,三六一,一三五	一八,六六一,〇〇三	一八,九四八,五七三

而して之を四季に別つに春季最も多く三割五分に當り、次で秋季、夏季、冬季の順次となりて、氣候によりて増減あるを知る。其の一覽表を掲ぐれば次の如し

大正十四年神戸市内各驛乗降客四季別表

驛名	乗客			
	春季	夏季	秋季	冬季
三宮	九三三,四〇四	六九八,〇三三	六〇三,七五五	五五八,五〇二
神戶	一,三三七,二二三	一,〇三三,〇四四	一,〇七二,二九九	四四八,〇六一
兵庫	四三九,〇八八	三三三,八八〇	二五八,〇二四	一六三,〇三三
灘	四三〇,四五五	三三三,八八〇	二五八,〇二四	一六三,〇三三
須磨	八六九,五四三	七七七,八三三	五三三,三四〇	三二五,六六五
和田	四七五,九三二	四一六,四二六	三五七,一四四	二二六,〇二五
鷹取	四六四,七五四	四一九,九一一	三三三,六〇〇	二二四,四五五
鐘紡	一,三三七,二二三	一,〇三三,〇四四	一,〇七二,二九九	四四八,〇六一
計	九,四三〇,〇三四	九,五七四,四三八	九,一八一,〇四八	九,三六一,一三五

更に神戸、大阪及京都の三大都市市内各驛の旅客乗車人員及旅客収入を見るに、我が神戸市が乗車人員の割に旅客収入の少きは、近郊旅客増の齎せし趨勢と観るべく、他都市の比較的高率なるは、遠距離旅客及上級旅客の多數なるに因るべき乎、即ち左表の如し。

旅客乗車人員並旅客収入表

(大正十四年一日平均)

合計	春季 自三月至五月		夏季 自六月至八月		秋季 自九月至十一月		冬季 自十二月至二月	
	乗客	降客	乗客	降客	乗客	降客	乗客	降客
計	九,四三〇,〇三四	九,五七四,四三八	九,一八一,〇四八	九,三六一,一三五	一,八二一,〇九六	一,三〇二,〇〇五	一,二六六,五五五	一,二六六,五五五
三宮	二,九三,五〇九	二,八三七,四〇三	二,八〇六,〇二七	二,七二六,一九一	一,〇三三,〇四四	一,〇三三,〇四四	一,〇三三,〇四四	一,〇三三,〇四四
神戶	一,八七〇,九四三	二,〇三八,三三三	一,〇一一,〇一一	一,〇一一,〇一一	一,〇一一,〇一一	一,〇一一,〇一一	一,〇一一,〇一一	一,〇一一,〇一一
兵庫	一,八二一,〇六九	一,九一〇,五五八	一,八六六,六八九	一,八六六,六八九	一,八六六,六八九	一,八六六,六八九	一,八六六,六八九	一,八六六,六八九
灘	一,三三八,七八九	一,四六八,三六六	一,三三〇,一五二	一,三三〇,一五二	一,三三〇,一五二	一,三三〇,一五二	一,三三〇,一五二	一,三三〇,一五二
須磨	五七〇,〇二九	六二六,二五七	五五五,六二二	五五五,六二二	五五五,六二二	五五五,六二二	五五五,六二二	五五五,六二二
和田	四八三,三〇六	二九一,五五五	四六八,〇三五	四六八,〇三五	四六八,〇三五	四六八,〇三五	四六八,〇三五	四六八,〇三五
鷹取	四一四,一九七	五三三,四〇二	四一三,三三八	四一三,三三八	四一三,三三八	四一三,三三八	四一三,三三八	四一三,三三八
鐘紡	二八一九三	一一,〇六六	一〇,〇四五	一〇,〇四五	一〇,〇四五	一〇,〇四五	一〇,〇四五	一〇,〇四五
計	九,四三〇,〇三四	九,五七四,四三八	九,一八一,〇四八	九,三六一,一三五	一,八二一,〇九六	一,三〇二,〇〇五	一,二六六,五五五	一,二六六,五五五

地域別	乗車人員	旅客収入	一人當收入
神戸市内各驛	二六、二六七	一五、九三四・〇〇〇	●六一〇
大阪市内各驛	五四、五〇七	四八、五〇〇・〇〇〇	●八九〇
京都市内各驛	一八、七八六	二二、〇九四・〇〇〇	●一八〇

(口) 貨物 大正三年以降の鐵道省全般の取扱數量と、當市各驛取扱貨物とを對比するに。

國有鐵道對神戸市内各驛取扱貨物數量表

年次	鐵道省全体	神戸市内各驛取扱數量			對省全体ニ對スル割合
		發	到	計	
大正三年	七〇、五四五、七五〇	六六六、五九三	四八四、六一六	一、一五、〇二九	〇・〇六
同四年	七、六〇一、三三八	六七七、九五四	五八五、九三三	一、二六三、八七六	〇・〇七
同五年	八四、二〇一、四六八	七五五、七六九	七三三、九六三	一、五八七、七三三	〇・〇八
同六年	九七、五〇六、〇八二	八六四、二二三	八三三、四八〇	一、六八八、六三三	〇・〇七
同七年	一〇六、六七、四四〇	一、〇四六、七六七	一、〇〇〇、九八四	二、二七七、七二二	〇・〇九
同八年	一九、八七九、〇五〇	一、二三五、九八二	一、一〇三、四一六	二、三三九、三九八	〇・〇九
同九年	一一三、二四七、七四二	一、四四三、七〇三	九六四、九六八	二、四〇八、六七二	〇・〇八
同十年	一四、七八〇、〇五八	一、〇八〇、一九〇	六六七、六七九	一、七四七、八六九	〇・〇五
同十一年	二八、一四一、一四六	一、三〇六、三四八	六九七、四八七	二、〇〇五、八三五	〇・〇五
同十二年	二九、五六四、八七二	一、三六六、二九九	六八八、七〇一	二、〇〇四、八四〇	〇・〇五

同十三年	一四〇、二四六、九九〇	一、四〇八、七七八	七五七、六一〇	二、一六八、七七八	〇・〇五
同十四年	二九、九四三、六四四	一、二九三、五〇九	八三三、八三三	二、一三六、三三三	〇・〇六

にして其消長を見るに、輸送數量は逐年増加の趨勢にあるも、特に當市は貿易港たる關係上海運により左右さるゝを窺見し得べく、則ち大正三四年以降歐洲戰亂の影響による船腹の不足は、俄に貨物を鐵道に轉嫁するに至りたるにより彼の七八年の内外貿易般盛の時には百貨鐵道に幅轄したるに反し、大正十年以降は船腹過剰によりて輸送貨物の減退を見る、其の消長正に海運と相共に平行するを知るべし。而も省全體に對する比率に差異なきは、鐵道營業哩の延長によりて其の取扱數量の累加せるを以て、本市取扱貨物數量の増加の割合に進まざるのみ。更に發着の割合を見るに、常に發送の勝れるは、當港輸入品の陸運によりて内地各驛に送達さるゝもの、相當多額に上るに因るものにして當港の輸入港たるを此處にも見る。

次に當市内各驛發着貨物に就て見るに、大正十四年中發送貨物の總量は一百二十九萬三千五百九噸、到着貨物の總量は八十三萬二千八百二十三噸、合計二百十二萬六千三百三十二噸にして、之を各前年と對比するに、到着に於て七萬五千

二百十三噸を増せるも、發送に於て十一萬五千二百十九噸を減少せる爲め、總數量に於て四萬六噸の減少を來せり。而して各驛の比較は發着共に神戸驛最も多く小野濱兵庫の順序にして、須磨は例年の如く最も尠し。其取扱歩合は、神戸驛總量の二割七分八厘を占め、小野濱の二割一分二厘、兵庫驛の一割八分七厘相次ぐ、即ち左の如し。

驛名	發送貨物		到着貨物		發着貨物合計	
	十三年	十四年	十三年	十四年	十三年	十四年
神戸	三九二,〇〇六	三六〇,一五三	二四〇,五九九	二四三,四九九	六三二,九〇五	五九三,六二二
小野濱	三三九,五九三	二七二,七五四	一五三,〇二五	一六,五三三	四八二,六〇七	四五一,二八七
兵庫	二四七,七七一	二四七,二六六	一五〇,五七三	一五〇,八三三	三九八,三四〇	三九八,〇九八
和野	一八一,〇三五	一〇二,二七〇	六,四三三	八,六四八	一八七,七四〇	一八八,九一八
新川	九二,九九四	九〇,二六八	七,六九八	八,三三四	一〇〇,六九二	一〇一,六三二
鷹取	四〇,六三三	四六,九二四	六〇,六九五	六四,六六一	一〇一,三四七	一一一,二八五
東灘	三五,五八三	三三,八九九	四九,七三三	七三,七三三	八一,三三〇	一〇五,九二二
神戶	八七,五九四	七,七九二	一六,八九〇	二〇,五〇一	一〇四,四八四	九二,二九三
須磨	一,〇八一	八五五	五,九九三	五,四八一	七,〇七四	六,三三七
計	一,四〇八,七三六	一,二九三,五九九	七五七,六一〇	八三三,八三三	二,一六六,三三六	二,一三六,三三三

翻て之が品種を觀察するに、發送貨物にて三萬噸を超過せるものは十二種にして、綿絲の十九萬七千九百五十九噸を筆頭とし、米十四萬三千五百四十三噸、雜

肥料六萬八百五噸、鐵及鋼五萬四千二百四十三噸、砂糖類四萬九千八十九噸、木材類四萬八千四百七十六噸、鐵及鋼製品四萬七千七百十四噸、飼料四萬三千三百五十噸、大豆粕三萬六千六百九十二噸、小麥粉三萬四千六百七十八噸、雜穀三萬三千九百十九噸、雜果物類三萬四百四十八噸の順序にして、又到着貨物の三萬噸以上のものは、七種にして、木炭の六萬一千七百七十七噸を最高とし、米五萬三千七百六十三噸、木材類四萬二千八百四十六噸、綿織物類四萬八百三十六噸、麥類三萬八千二百四十五噸、砂利二萬五千四百三十七噸、鐵及鋼二萬二千四十九噸等相次ぐ。而して之等の荷動の趨勢を概言すれば、大體に於て發送は、海運到着貨物の連絡發送及生産加工品を各地方に分布するものにして、到着は食料品各工業原料品及相場變動による商略の爲に市場に集中するもの、外貿易輸出品を主たるものとす。又發着總數量より見れば、第一位は綿類の二十萬二千二百四十四噸にして、米十九萬七千三百六噸之れに次ぎ、木材類九萬一千三百二十二噸、鐵及鋼七萬六千二百九十二噸、鐵及鋼製品類六萬七千四百二十四噸、雜肥料六萬四千九百噸、雜肥料六萬四千九百噸、木炭六萬四千五百五十三噸、麥類六萬三千四噸、雜果物類五萬四百八噸、砂糖類四萬九千二百二十八噸等の順次なり。今市内各驛につ

神戸港大観

他小	計	五、六、三三	四、九、七三	八、四、五	二、四、八二	一、五、六	四、八、四	七、三、六	六、八、四七	六、〇、一	一、五、六八
總計	計	一、五〇、	一、九、	一、七、	一、八〇、	二、七、	九、〇、	二、七、	九、〇、	二、七、	一、五、

到着

品種	名										計	主ナル仕出驛
	神戸	小野濱	兵庫	和田岬	新川	鷹取	東灘	神戸港須磨	計	主ナル仕出驛		
米類	九、八四三	四、六九	九、七七七	二、〇、三	二、〇、三	一、〇、〇	二、九七	七、二九	五、六	三、八、二四五	二、八、八	下松、津山、大田、三田、三木、三田尻、土山、明石、伊丹、總社、岡山
大豆類	一、五九	一〇	三、三	一、三	一、三	一〇	一	一	一	三、八、二四五	三、八、二四五	佐世保、敦賀、名古屋
雜穀類	八、一五	一〇	二、二	一、三	一、三	一〇	一	一	一	一、三	一、三	佐賀、彦崎、川尻、清水
生甘藷	四、三	一	二、二	一、三	一、三	一〇	一	一	一	一、三	一、三	藤澤、三島、猿田、濱松
生馬鈴薯	二、二七	一	二、二	一、三	一、三	一〇	一	一	一	一、三	一、三	古間木、枇杷島、濱松、岡山
生野菜	九、七七	一	六、九	五、七	一〇	一〇	一	一	一	一、三	一、三	倉敷、已斐、西阿知、梅小路、山崎
柑類	一、〇、四	一	三、三	一、三	一、三	一〇	一	一	一	一、三	一、三	名手、妙寺、笠田、糸崎
其他ノ果物類	一、四、二	一	二、六	五、七	一、三	一〇	一	一	一	一、三	一、三	富士、柳本、畝傍、津山、瀨戶、福山、福崎、瀨戶、御着
藥製	一、九、四	一	三、八	二、七	一、三	一〇	一	一	一	一、三	一、三	安治川口、河内、島田、谷川、中伏木、佐久、藤原、上郡、庄原、日原、江津、三次、上郡、三谷、有年、甲立
小計	四〇、二八七	六、四八	四、四、一	二、三、五	二、三、五	一、三、九	二、四、四	七、二、五	七、五、六	一、五、三、二	一、五、三、二	
薪木	一、九、三	八、八	五、六	一、三	一、三	一〇	一	一	一	一、三	一、三	
木材	三、八、一	三、五	四、〇、〇	三、五	一、四	二、九	一、四	七、二	七、二	三、六	三、六	
炭類	六、五、一	二、八	一、九	一、三	一、三	一〇	一	一	一	一、三	一、三	

第八章 陸運の概況

品種	名										計	主ナル仕出驛
	神戸	小野濱	兵庫	和田岬	新川	鷹取	東灘	神戸港須磨	計	主ナル仕出驛		
石炭	一〇〇	四〇三	五〇三	九〇	六六五	四〇九	五五〇	一〇七	六三	二、九三〇	二、九三〇	長、岡山、重安
石炭利材	二六〇	六四九	九三	一四一	二、三、七	三、七、九	一、八、三	一〇三	二、五、七	二、五、七	二、五、七	明石、釣橋
石炭類	一〇〇	四〇三	五〇三	九〇	六六五	四〇九	五五〇	一〇七	六三	二、九三〇	二、九三〇	神戸、大嶺、飾摩
鐵礦	一、〇、七	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	神戸、安治川口
鐵礦類	一、〇、七	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	信州中野
石炭及油	一、〇、七	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	吉水、鹽ヶ井、大更、新發田、土岐津
銅及油	一、〇、七	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	隔田川、雄物川、沼垂、石巻
小計	五、四、九	六、四、八	六、四、八	二、五、七	八、二、五	二、七、九	六、六	一〇七	一、二、八	八、九、二	八、九、二	梅小路、鷹取、神戸、濱松、濱多度津
水産	一、八、六〇	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	鹽竈、淡、敦賀
鹽類	一、八、六〇	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	伏木、鹽竈、敦賀、岩美、長崎
鮮魚類	一、八、六〇	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	下關、長崎、香住、大阪
小計	一、八、六〇	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	
加工品	二、〇、二	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	岡山
澱粉類	二、〇、二	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	川崎、大村、大阪
砂糖類	二、〇、二	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	
食料油類	二、〇、二	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	龍野、野田、牛田、新生
調味油類	二、〇、二	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	
小計	二、〇、二	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	
品計	二、〇、二	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	一、四、一	

品馬	計		他小	總計
	小	計		
品馬	三〇	二四	一九九	
小	二五	九二	三〇三	
計	四九、六四四	三、七三二、〇九二	九二九、七五六	六、〇九二、〇〇七
其他	二四三	一五〇	八、六四八、三三四	六、五二、七八
計	四一九	五三	八三	四八
小野新町、青森				二、七、二八二
計				四、三〇九

第二節 電車

當市に於ける郊外電車の乗込線は、阪神電氣鐵道、阪神急行電鐵、兵庫電氣軌道の三軌線あり。其他摩耶鋼索鐵道あり、其の始發點は市外にあるも、市内と自動車連絡を以て便す。今各會社の營業狀態を概記すれば次の如し。

電車名	阪神電氣鐵道	阪神急行電鐵	兵庫電氣軌道
資本	二五、〇〇〇、〇〇〇円	三〇、〇〇〇、〇〇〇円	五、〇〇〇、〇〇〇円
營業哩數	二五哩六七	四五哩六四	一一哩三八
運轉車輛數	四八、一八〇輛	一、七六七人	八、六五九
運轉從業員數	一、一〇〇人	年一割二分	三〇六人
最近利益配當率	年一割三分	八七七、九七一円	年一割
同乗車券賣上代金	八七七、〇五三円		七九七、三九六円

而して貨物の輸送は三噸半乃至五噸の貨物車を配し、定時臨時又は貸切となし、近時之を利用するもの漸次多きを見る。即ち左表の如し。

電車名	發送貨物數量		到着貨物數量	
	大正十四年	大正十三年	大正十四年	大正十三年
阪神電氣鐵道	三八、七七四	二〇、二八三	二九、四六六	一五、二八四
阪神急行電鐵	五二、九八一	一三、八四一	一八、二三一	四、七四八
兵庫電氣軌道	四、二二六	四、九六一	三、一五〇	三、〇一五
計	九五、九七一	三九、〇八五	五〇、八四七	二三、〇四七

第九章 金融

第一節 金融の概況

大正十四年に於ける我が神戸金融界を通観するに、一般に人心萎縮し、商品界事業界共に依然不振なる爲め、資金の需要を喚起せず、變態的に緩慢なりしと謂ひ得べし。唯だ輸入減退に因る貿易の好轉、特に輸出の大宗生絲綿絲布類の活躍、並に之に伴ふ爲替資金の需要、延いて之に關聯せる事業界の好勢、債券界の般賑、民間外資の輸入、日銀政府預金の減少等に因りて、一般季節的金融以外に本年の金融界に波動を齎したるに過ぎず。即ち年初市場資金潤澤にして日步漸落歩調なりしも、中旬以後東京高と舊季節資金のため繁忙を呈したる如きも、間なく落付き又決済資金の回収は迅速順調に行はれたるにより、各銀行手許豊富平穩裡に二月となりしが、遊資は益々潤澤にして、其上割引國庫證券の償還あり、引續いて緩慢状態を持續せり。特に二十一日には東京高田商會の破綻あり、延いて永樂銀行臨時休業の發表等ありて、多少の動搖を懸念せられたるも、當市場は

比較的関係薄き爲め案外静にして、三月に入りたるに前月末決済資金の回収後れ氣味なりしと、酒造税の移納月末資金日銀返済又は社債の拂込及公社債の利拂等のため、幾分動搖を免れ得ざりしも一般に新規事業不振の爲め比較的閑散を呈せり。四月初米穀證券の償還あり、地方流出金の回収も潤澤に運びたるも、酒造税其他の移納並に近來金融硬軟の鍵を握れるの觀ある大阪棉花代金資金決済が、不相變巨額に上れる爲め、日歩は無碍に下落を示さず同月十五日日銀利下の發表ありたるも依然コール市場として直接影響なく、たゞ前途金利低下の趨勢を見越し長期物の出手多かりき。五月には引續ける事業界の不況と、一般商況の不活潑に基く遊資の増大及公社債の償還による資金の潤澤とは、近年稀なる緩慢状態を現はし、日銀貸出高及兌換券發行高は共に震災年以來の記録を示し、金融基調の緩慢状態が震災前の平調に復せるが如き觀ありき。斯くて六月を迎へたるに、公債償還公社債利拂等の爲め短資は彌が上に豊富となりしも、其後蕪價の高きにより、相當多額の需要を喚起せし生絲資金の地方流出幅狭し、漸く需要關係は圓滑に進捗しつゝ、上半期を了れり。七月は由來所謂夏枯期とて、一般商業界の沈靜期なるも、本年は殊更に事業の不振甚だしき爲め資金の

需要起らず、大勢は依然緩慢の有様たりしが、漸く比較的多額なりし製絲資金の需要ありしと偶々舊盆資金需要が、月末と重なりたる爲め、一時繁忙を呈したるのみ。九月に入り前月來引續ける舊盆節季資金は相當の額に達したるも、一方其の回収亦迅速にして市場の遊資日々増加し爲に日歩は漸落を辿れり。十月は前月末決済資金が第一期所得税納税に振替へらるゝもの多きと、其回収著しく遅緩なるに加へて、資金の東流及晚秋蠶絲金の地方流出冬物仕入資金の流出等相亞ぎて行はれ市中銀行手許は相當窮屈の感あり、下旬遊資多少豊富となりしが、月末接近と共に資金の移動頻繁となりしも準備十分なりし爲出合は圓滿に行はれたり。十一月は資金の回収順調に行きしが一般に遊資はさのみ豊富ならず、コールは一上一下ありしも月末奔騰取引繁忙出合不圓滑を告げたり。本年は農作物の増收と高値とにより地方金融は潤澤となりたるに、其の資金は死藏せらるゝ額多くして都會に歸り來るもの殆んど無く遊資少額なるに加へて、外國爲替の決済額は多額に上り、爲替銀行手許も爲に常に手薄にて市中は日歩に係らず出合尠く緊張を續けたり。越へて十二月は前月末決済資金の回収極めて迅速、短資は市場に横溢し資金は豊富たり、今秋農産品の豊稔は蠶絲の好

況と相俟つて地方多年の不景氣を一掃したる觀あり、従つてコールに一段の引弛みを見せたるが漸次年末準備用としての資金の蓄積額加はると共に強含みとなれり。クリスマス明は外國爲替資金の移動頻繁を豫測せられたるに案外變動無く、二十八日川崎造船所の配當金支拂の爲巨額の資金移動ありたるのみにて、年末切迫も資金の手許保留多かりし爲め何等の影響なく市場は近來稀なる平穩裡に越年せり。

第二節 銀行

大正十四年末の神戸市に於ける組合銀行數は三十六行にして此等本支店出張所の數實に八十三に達せり。内五行は本店銀行、二十四行は内地銀行支店、七行は外國銀行支店たり。尙此の外に組合に加入せざる銀行あるも規模小にして取引も亦尠し。左に之か名稱竝に數年間に於ける預金竝に貸金を表示す。

神戸市内組合銀行名稱

- 本店銀行名
- 第六十五銀行
 - 兵庫縣農工銀行
 - 神戸商業銀行
 - 西銀行
 - 神戸商業銀行
 - 兵庫縣農工銀行
 - 神戸岡崎銀行

内地支店銀行名

- | | | |
|--------------|----------|----------|
| 三井銀行支店 | 第一銀行支店 | 横濱正金銀行支店 |
| 三十八銀行支店 | 住友銀行支店 | 三菱銀行支店 |
| 加島銀行支店 | 三十四銀行支店 | 臺灣銀行支店 |
| 朝鮮銀行支店 | 近江銀行支店 | 山口銀行支店 |
| 川崎銀行支店 | 日本興業銀行支店 | 村井銀行支店 |
| 藤本ビル
銀行支店 | 藤田銀行支店 | 十五銀行支店 |
| 鴻池銀行支店 | 大阪野村銀行支店 | 第一百銀行支店 |
| 安田銀行支店 | 加古川銀行支店 | 灘商業銀行支店 |
- 外國銀行支店
- | | | |
|--------|----------|-------------------|
| 渣打銀行支店 | 香港上海銀行支店 | インターナショナル
銀行支店 |
| 嘴喃銀行支店 | 蘭印商業銀行支店 | 獨亞銀行支店 |
| 極東銀行支店 | | |

組合銀行預金調表

年次	總座			預金			高			年末現在高
	公金	當座	特別當座	定期	其他	計	其他	計		
大正七年	二二,二七八	九,五四七,五八九	二〇,九四六,三三〇	四,三六四,五三九	三,二八二,三三三	〇,八一,五九二,四四八	—	—	三六〇,二五六,〇三三	
同八年	九,三〇〇,九三三	二〇,〇六〇,二九九	四〇,二六四,〇三六	五〇,五二一,三三六	五七,〇八八,二四九	一,三五四,九六六,四九九	—	—	四〇,一〇九,九八三	
同九年	二四,三三,四六五	九九,七一四,五二〇	四三,七三二,六五〇	五〇,四〇九,八九三	八〇,五三〇,五九九	二,七八一,三四五,三四七	—	—	三七八,六六九,〇六四	
同十年	三〇,九二,〇〇七	六八,六二八,四一四	三五,五二九,九四五	五,三八〇,四四〇	六,五五九,八三四	八四,一三〇,九六九,九一	—	—	三七九,一八六,七〇〇	
同十一年	四,五三〇,一〇三	六三,七五三,九六一	三五,五二四,四二七	四,九三三,四三三	六,〇三六,七三二	七八五,三二一,八三五	—	—	三二七,三二四,五〇〇	
同十二年	五,三〇四,一四七	六五,五〇八,〇六一	三五,二四三,三三四	四,九三三,四三三	五,〇一九,三三三	七,七三六,九八七,五五六	—	—	三二七,四三三,八四〇	
同十三年	五,三〇四,一四七	九二,六八七,〇九〇	四〇,九八六,三三九	三,八四二,六五八	五,六二八,七四九	七,七三六,九八七,五五六	—	—	六五九,一七三,七三三	
同十四年	六,一八三,三三三	六〇,九六二,四三三	四〇,九八六,三三九	三,七三九,二五八	五,〇一九,三三三	一,二四六,二六八,二三八	—	—	六九〇,九三三,三三三	

組合銀行貸出金調表

年次	總座			出金			高			年末現在高
	證書	手形	當座貸越	コール	割引手形	其他	其他	計		
大正七年	八二,八四四,九五五	一〇,二九七,二二五	一,三四五,九〇〇,三二九	八,五四四,八四六,九九〇	八,一八六,一八六,一八六	九,四四七,四四七	—	—	二八二,三三〇,四七七	
同八年	一〇二,九三六,三三三	一〇,六四三,〇六八	一,四六六,八四六,九九九	一,五三八,二〇〇,六八三	一,五九一,五九一,五九一	一,〇二七,〇二七,〇二七	—	—	四三三,四三三,四三三	
同九年	六四,〇八七,七二二	一,一三三,四三三,六八九	一,九三九,五五九,九三〇	一,二八四,八三三,七三三	一,八六六,三三三,八三三	二,四七九,三三三,七三三	—	—	四三三,四三三,四三三	
同十年	一六,〇八四,七三三	一,二八五,五九六,九五五	一,一四一,三四七,七三三	七,八〇〇,四九六,八五〇	一,六九七,七三三,七三三	九,四九八,二九九,二九九	—	—	四三三,四三三,四三三	
同十一年	二九,〇三三,三三三	一,一六七,九七五,七三三	一,一三九,〇三三,三三三	九,四四四,七三三,七三三	一,三三三,七三三,七三三	一,〇四七,三三三,七三三	—	—	四三三,四三三,四三三	
同十二年	五三,六四七,七三三	九,九八,六六六,六六六	一〇,九九九,九九九,九九九	九,四四四,七三三,七三三	一,三三三,七三三,七三三	一,〇四七,三三三,七三三	—	—	四三三,四三三,四三三	
同十三年	四二,七三三,三三三	一三,二八九,三三三,三三三	一四,一〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一三,〇二七,七三三,七三三	一,三三三,七三三,七三三	一,〇四七,三三三,七三三	—	—	四三三,四三三,四三三	
同十四年	一〇,二六六,六六六	一六,二四七,四〇九	一三,二八二,八四八,八四八	一七,六一〇,七七八,八三三	—	—	—	—	四三三,四三三,四三三	

其他特種金融機關として貯蓄銀行・郵便局・信用組合・信託會社・無盡會社・質屋・頼母子講・金銭貸付業等ありて、各金融の圓滑を計り近時著しく發展の傾向あり。其中二、三を示せば、

神戸市内各局郵便貯金調表 (大正十四年末)

局數	人員	金額	前年末ニ比シ増加	
			人員	金額
五二	四〇九、三四四	一九、四八〇、八九六	一五、一七五	五七九、五七九

神戸市内信用組合調表 (大正十四年末)

種目	須磨信用組合		神戸信用組合		兵神信用組合		兵庫信用組合		總計
	貸付金	當座貸越	貸付金	當座貸越	貸付金	當座貸越	貸付金	當座貸越	
貸付金	二七四、六一・七三	一五、六八七・五七	七九、五五・七	二、二八〇、二七・七	一四八、四〇二・三	一三三、七五・五三	一、八八七、四九三・〇六	—	一、八八七、四九三・〇六
當座貸越	—	—	—	—	—	—	—	—	—
割引手形	四三、三〇〇・〇〇	—	八七、八八五・九	二、八三三、三六・二六	五七、三六・七九	九六、二七〇・五四	三、六三九、一八・八七	—	三、六三九、一八・八七
預金	七三、七〇一・九四	—	六八、七三・七八	—	一〇九、一三六・六二	—	—	—	一、二八二、六八七・二八
現金	九、八四七・五九	—	三、八、七三・五七	—	一八、三三三・九三	—	—	—	二、八五、一三七・〇八
收入利息	二五、三九九・九七	—	九六、六三四・九〇	—	三三〇、三三三・〇三	—	—	—	五、六七、七九〇・〇一
割引料	四、一〇一・八四	—	七、〇六・六六	—	一九二、二八〇・五九	—	—	—	二、〇、六二二・七三
其他利益金	五五、三七三・二七	—	一、八〇九・〇〇	—	一六、二四三・七五	—	—	—	七、二〇、五七三

神戸港大観

支拂利息	五八、七三三・六八	三六、七五五・六六	二六六、九七八・四五	三六、二九四・八二	六、三五八・三三	四〇九、〇〇五・一四
其他損金	一五、八二二・九五	三五、八五〇・〇六	二六、五三三・一一	三五、〇七〇・〇五	一四、七四八・五七	三三八、〇六六・七四

神戸市内信託會社調査表 (大正十四年末)

種目	神戸信託株式會社	勸業信託株式會社	眞野信託株式會社	濟生信託株式會社	日加信託株式會社	大和信託株式會社	計
資本金	三〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	二,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	八,〇〇〇,〇〇〇
信託金	九〇〇,〇九七	五六七,〇六八	八四一,二三八	四八九,二二七	二七〇,三三七	一八四,一七九	三,二五三,七九六
貸付金	一、八七三、三六六	八五二、七〇四	八三三、九五四	八四七、〇三三	六六、〇〇〇	二〇五、九一〇	四、七〇〇,七七六
預金	二、八三九	五二、五〇四	三三、五八四	七三、二〇八	一三三、〇〇七	一四、九六七	三三七、五〇九
現金	一、四七三	四、七五二	一三三	一八〇	一、三三三	二、五四八	一〇、三〇七
保證債務	四、九三三・六七	一八〇、九二五	二四、四五五	一五、一四〇	—	一八、五〇〇	五、三三、一〇一
借入金	一、五七、一三五	一九、九九三	—	—	—	—	一、五七、一三五

神戸市内無盡會社調査表 (大正十四年末)

種目	神戸無盡株式會社	三木無盡株式會社	神戸出張所
資本金	二〇〇,〇〇〇	—	—
無盡契約高	一、〇七一、〇六五・五〇	—	—
受入済契約高	三〇七、一四二・五八	—	—
受入未済掛金高	七六三、九二二・九二	—	—
給付済高	三二九、八〇〇・〇〇	—	—
預金	—	—	三六二、三五五
現金	—	—	—

未拂無盡給付金	二〇、一四三・三五
未收無盡掛金	三一、三三七・二二
貸付金	七、七八六・二八
未拂無盡給付金	六七、五五〇・八一
未收無盡掛金	二六、二七三・八五

因に上記の外大正十五年二月營業を開始せるものに扇港無盡株式會社あり
尙目下申請中にかゝるものには神戸商業無盡日本無盡の兩株式會社あり。

神戸市内質屋調査表 (大正十四年末)

年度	店数	買物		貸高		買物受戻		流失	
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
一四	二六〇	二、〇三七、六八八	二、八七〇、二五五	一、六四三、八四七	九、八四八、九八四	三、四、六九〇	一、二七、三三七	—	—

第三節 神戸手形交換

從來神戸手形交換所加入銀行数は三十三行なりし處、攝陽銀行は三十四銀行に合併し、岸本銀行は神戸商業銀行となりしも、之は兵庫縣農工銀行の代理交換なるを以て現在は三十一行となり、神戸郵便局を加へて三十二たり。代理交換

銀行は神戸商業銀行の外に、加古川銀行支店、灘商業銀行支店、極東銀行支店、湊西銀行計五あり。其の交換高は大正八年後一時減退を見たるも、十三年以後急増し本年は在來の記録を破るの數字を示せり。則ち最近十ヶ年間に於けるものを纏むるに次の如し。

手形交換高累年表

年次	枚	金額
大正五年	一、〇〇五、五七二	一、九四八、四四八、一六五、八二〇
同六年	一、二二四、五二八	三、五九九、四九六、三八四、二二〇
同七年	一、五九〇、一〇九	六、五七六、〇〇六、三七九、一四〇
同八年	一、六四六、二五五	七、二〇九、四三七、一七〇、九九〇
同九年	一、六七一、五五九	六、三八六、九六七、四四一、一〇〇
同十年	一、五六二、八八五	四、二四四、六〇一、三四一、九〇〇
同十一年	一、七九五、四四二	四、五七八、六九〇、六四二、六七〇
同十二年	一、九〇八、一二〇	四、八九二、〇二一、五四一、七九〇
同十三年	二、二九〇、〇二七	七、七八九、四三二、一二七、七五〇
同十四年	二、四〇二、八三七	八、五八〇、七四二、九〇二、八五〇

第十章 物價の概況

歐洲大戰後の世界經濟界の擾亂と、震災てふ特異なる地變によりて受けたる變態的我が財界の狂ひは、數年間の隱忍生活と營々たる整理とによりて、漸く好轉の曙光を認め得るに至りしは、眞に欣喜に堪へざる所なり。

大正十三年の貿易の趨勢を見るに、入超六億四千餘萬圓なりしもの、大正十四年に於て、貳億六千餘萬圓を減少せしは、これ我が貿易が漸次平衡性に回復しつゝある事を立證せり。如之昨年三十八弗二分ノ一まで低落したる、我が對外爲替が、最近四十三弗臺に昂騰したるが如きは、我が國家經濟の信用の好轉に向ひたることを表明し、又國內的には物價の低下作用を誘引して、國民生活の安定を齎らすことを信するものなり。殊に本年は生繭及び農作物が一般に豊饒なりしかば、農家の懐中は相當に潤澤に赴き、農村の好景氣は反動的に我が財界に好刺戟を與へたり。要するに外には、英米諸國の財界の活況を見るあり、内には事業界の諸整理も漸く一段落を告ぐるに至り、此等各種の材料を綜合する時は、我が經濟界は漸次好調に轉じ、事業界も亦昌盛の階段にありと謂ひ得べき乎。然

れども國民に直接影響する物價は、昨年程の暴騰は見ざるも累年の世界的高騰の隋勢にて、著しき下落もなく人々は生活の脅威に直面しつゝ、均しく困憊の裡に越年せり。

左に百餘種の騰落を月別に掲げ、尙主なる品種に就て騰落の概況を記せば次の如し。

十四年 月別	騰貴品種數	下落品種數	保合品種數
一月	四	三	三
二月	十	十	十
三月	十	二	三
四月	十	四	二
五月	十	四	二
六月	十	三	三
七月	十	三	三
八月	十	四	三
九月	十	三	三
十月	十	三	三
十一月	十	三	三
十二月	十	三	三

正米 前年より高値のまゝ越年したる米價も、外米の拂下或は新米の賣物によりて漸次下落して、二月に安値になりしも逐次昂騰して八月に入りて其の最高價額を示せり。要するに騰落の主因は米自體の需給關係にあるは言を待たざれども或は一派の思惑買と所有者の賣惜み等の人為的作用なるを見通すべからず。今米價の趨勢を知るため一月以降の當地相場を示せば次の如し。

品種別	月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
播州赤三	石	四、九	四、八	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三
九州青三	石	四、九	四、八	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三
讃岐大	石	四、九	四、八	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三	四、三
朝鮮釜山	石	三、九	三、八	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三
臺灣米	石	三、九	三、八	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三
西貢米	石	三、九	三、八	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三	三、三

雜穀・海産物・其他・飲食物

昨年の不作に引替へ本年の穀物及雜穀は、一般に豊作なるに拘らず、前年よりの隋勢にて相場に變動なく、割合に平穩に経過せり。これを概記せば次の如し。

當市場に於て取引せらるゝ大麥は、一石に付一月は拾壹圓五拾錢にして六月

に至りて品薄になるに従ひ騰貴して拾四圓となりしも、七月新物の市場に現はるゝに及び拾貳圓に下落し、年末には五拾錢高の拾貳圓五拾錢にて越年せり。其他小麥裸麥も前年と大差なく、大豆小豆菜豆豌豆落花生に於ては、年初より漸次下落を見たるが、豌豆のみは北海道方面よりの入貨少なかりしと、在庫品薄のため、年末には少々騰貴せり。次に胡麻の最高價額は二月にして百斤拾九圓六拾錢なりしもの漸次下落し常に拾七圓臺を低迷し、其他製油原料も同様の騰落ありたり。小麥粉は前年末各社の原料手持關係と海外原料の騰貴に隨伴して上向の模様なりしも其割合に伸びず、三月末に至りて海外原料の狂騰に刺戟され頓に活氣を呈し、爾來漸騰歩調を辿りつゝありしが、四月下旬海外小麥相場は漸落を來したると、對外爲替の恢復と相俟つて粉價を抑壓しつゝ六月に入りて更に海外小麥の漸落に由り粉價二等粉も五圓臺より一時四圓五拾錢に暴落せり。其の後反動的に稍々立直りを見たるも、海外市場の形勢依然として芳しからず、旁々各社の手持原料豊富の爲め、一進一退下押を續けつゝ越年せり。次に鹽乾魚にありて最も其の需要ある北海紅鮭は、九月の新物の市場に取引せられてより、漸次正月に近づくにつれて高騰し、例年の通り二月の舊正月が最高に

して、十貫貳拾八圓に上れり。尤も海産物は、支那方面との取引多き爲め支那人の嗜好する乾鮑、鱈、海參、貝柱等は支那國情の如何に依り、相場に變動あるものゝ如く、近來の頻々たる支那内亂は、不尠當市場に打撃なしとせず、本年は五月上旬に於ける外貨排斥事件と年末の奉郭戰爭のみに止まりしを以て取引は幸ひ圓滑に行はれ、乾鮑も二月は百斤貳百拾圓が最高にて、三、四月は保合の状態の儘にて過し、九月には百八拾圓に下落し、年末は百九拾圓に上れり。鱈は二月に百斤八拾圓臺を稱へてより順調に取引され著しき騰落なく経過せり。海參は支那人の最嗜好品にして其の種類多く、従つて價額に非常に等差ありて、百斤八拾圓程度より百八拾圓迄の間にて本年は二月が其の最高價額を示し、六、七月が最下落となり、其の後漸次昂騰して最高百七拾圓にて越年せり。又鯉節に於ては、年初各地漁場好漁の報を得たる爲め、當地鯉節市場は新節の出廻りを豫想して、高値思惑物を安値にて手放し、若くは委託販賣して京坂地方に送荷する等在荷品の整理を計りたる結果、氣配軟化し、大節百斤百參拾五圓、小節九拾五圓見當に低落し、市場不味閑散に推移したり。

清酒 名聲天下に噴々たる當地方の清酒は、前年末に賣込のもの末だ消化さ

れず、相場は弱保合の有様にて商況頗る閑散の状態にして殊に毎年二月は其の甚しきを例とするも、本年は一層需要減退し益々商況軟弱に陥りて、不況續なる爲め、四月廿日より卸賣相場を大樽一挺に付五圓、一升瓶一本に付拾錢の値下げを發表せり、従つて幾分市價の安定を見たるが如きも其の後、暑氣加はると共に需要益々不良に傾けり。十月の需要期節に向ふるも市況一般に不振にして賣行活況を呈せず、されど歳晩に近づくにつれて稍々好況を齎したる觀あり

砂糖 内地製糖會社は砂糖不振の對策として、各社協定し精糖生産を制限せん事を議せしも、反對者ありて容易に實行されず、然れ共内地糖の市價が既に採算値以下に低落し且つ對支輸出も支那排貨のため思はしからざるに依り、自衛策として出來得る限り操業短縮をなして、精糖生産量を調節して相場の變動を防止したる結果前年と大差なかりしが如し。

セメント 震災の影響に依りて各社の無謀なる大擴張に依る生産額増加に對して需要は折角期待されたる復興事業進捗せざる爲めに、一時は九圓まで暴騰したる市價も、八九月の頃には實に參圓といふ稀有の安價にまで低落したりされば各製造會社の代表者は之れが對策として、十月前年同様二割五分の操

短を爲す事を決議し、極力需要供給の調節を圖ると共に、最低市價を五圓拾錢に協定したる等努力する所ありたるも需要振はず推移したり。

鐵材 遅々として進捗せざる事業界は直接鐵材に及び、問屋筋在荷の壓迫に祟られ弱保合の裡に推移し、而して漸く投物も一巡して底入模様となり多少上進歩調を呈しつゝ、需要期に向へど、依然一般不況の爲め賣行なく又問屋筋は金融難のため持ち堪へざるものもありて、處分品出現するに至り相場は殆んど釘付相場てふ不況裡に終れり。

棉花 綿絲布原料の棉花は、其の供給を海外に求むる關係上海外市場の相場に左右せらるゝ有様にて、十四年に於ける棉花の商況は米棉の増收と内外共に需要の増加と、米國財界の依然として活況を呈したるため、大保合を續け、動き極めて少なく一方出廻りに押され、延び悩みの有様なりき、次に印度棉は買付旺盛にて、米棉に比し、下げ溢りたるも豊作出廻りの爲め、漸落歩調を辿りつゝ推移せり。

生絲 新春を迎へ、定期絲高値にありしも、依然として活氣なく、年初最優等格にて百斤千九百六拾圓にて、二月に入り相場漸落歩調を辿りしため、更に活氣な

く買見送り状態にて、百斤千九百五拾圓に下落し、其の後六月に入りて、歐洲方面より安値引合の爲め、輸出稍々氣直り模様、内地向も之がため、幾分小康氣配なりしも、取引は沈滞を脱せずして、七月に入り、定期絲漸騰のため、内地亦活氣付き、賣行良好となりて、價額も百斤貳千百拾圓に上り、漸次順調なる商況に向ひしも、其の割合に商談抄々しからず、其の上市場への出廻り相當にありし爲め、年末には百斤千九百八拾圓臺を低迷し、不況裡に越年せり。

木材 震災に由る復興需要の見越輸入も、殆んど中絶せしが、復興事業抄々しからざるに依り、多量の在荷を消化するに至らず、其の上金融は硬塞し、賣行悪しく、相場弱含み、更に下半期に至りしも、頭重く賣行き抄々ため、相場下落し、夏枯期も過ぎ、需要期に入るも、更に荷動きなく、従つて價額も一進一退して、尺角二間物松材にて、一月の拾七圓最高にて、七月の拾貳圓を最低とし、其の後漸騰して、年末には拾參圓五拾錢となり、又杉板の六分もの、一坪に付き、一月の貳圓八拾錢が最高、七月の貳圓四拾錢が最低にて、年末には貳圓五拾錢弱みにて、越年せるも、在荷薄の米松は前年より約一割方昂騰せり。

肥料 各種肥料は近來の米穀高に連れ、漸騰歩調を辿りしと共に、地方農家が

從來肥料の買付けを餘り行はざりしに、今年は農作物の増收と、藪昂騰のため、夏季施肥の買進みなどの理由によりて、各種肥料は一齊に暴騰し、大正九年來の新高値を現はせり、即ち海産肥料は前年よりも十萬石餘の増收を報じたるにも拘らず、相當高値を唱へ、又大豆粕は大豆が歐洲方面に輸出せらるゝ結果、大豆粕の思惑が行はれし等の直接原因により、暴騰し、市場活況を呈せり。

左に諸種肥料の相場を示せば次の如し。

品名	月別											
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大豆粕 十貫	四・五	四・六	四・三	三・九	三・九	四・三	四・八	四・九	五・〇	四・七	四・八	四・五
海産肥料 百斤	八・〇	七・四	七・三	七・一	六・九	六・六	七・二	七・二	七・三	七・三	七・三	七・四
植物性肥料 百斤	七・〇	七・〇	七・七	七・三	七・三	六・八	六・三	六・三	六・三	六・五	六・五	六・五
智利硝石 百斤	七・四	七・四	七・九	七・三	七・三	六・一	六・三	六・三	六・三	六・五	六・五	六・五
安 百斤	七・六	七・四	七・九	七・三	七・三	六・一	六・三	六・三	六・三	六・五	六・五	六・五
人造肥料 十貫	三・五	三・五	三・三	三・三	三・五	三・六	三・六	四・〇	三・五	三・四	三・四	三・四

麥・稗・眞田及麻・眞田 内地製帽所の仕入時期により、年初は、前年末に對比し、約貳拾參錢方向上し、稍々好況を呈せり、三月末に至りて、内地製帽所の仕入時期も終了に近づきし關係上、下向歩調を辿れり、他方輸出向五菱及單菱は、海外の注文

に支配せられ、五菱に於ては五六錢方、又單四菱に於ては貳參錢方、何れも昂騰氣配たり、四月には麥稈眞田單四菱は、各種共前月と大差なかりしも、片丸菱は壹貳錢方騰貴し、五菱細物又參四錢乃至拾錢方昂騰し、對外爲替不利なりしに不拘、生産薄の爲、強氣配となり、其の後引續き各品種共多少硬調氣味を示して、單菱各耗共貳參錢方又丸菱四五錢方何れも昂勢を辿り、市況一般に活氣を呈せり、其の後下半期に至りて、在庫品薄の關係上、前途尙有望ならざれども、各産地原料採收の成績、良好の報傳はりたる反動として、多少上進を示したりしが、之に反して、九五菱合七猫等は稍々軟調裡に經過せり。次に麻眞田は、普通七本打十三本打共現品薄の關係上、年初來依然硬調氣配を呈し、前途好望にして引續き四月に至り生産手控へのため、市場の在品尙更拂底し、爲めに取引値段の如きも、貳參錢方騰貴し、五六月も硬調を辿り、六月末、需要國に於ける輸入決算期なると、爲替關係其他獨逸に於ける關稅問題等の爲め、輸出激減せしかば、氣配惡化し、貳參錢安の弱保合たり、其の上七本打は海外輸出抄々しからざると、一面生産状態漸次増加の傾向ある等の關係上、取引相場約貳參錢の下落を見るに至れり。

燐寸及燐寸軸木 當地に於ける燐寸市場は、舊臘よりの持越し在庫品相當に

ありしたため、各工場共、自然生産品消化に追はれつゝ、推移せり、而して仕向地の支那中南部方面並に香港、新嘉坡方面にも相當の滞貨ありしに不拘、本年は前年より約倍數以上の輸出を見たるは、主として支那燐寸工場の萎縮せる餘響なり、其他南洋瓜哇方面向輸出増加は、需要季節に向ひたる結果なり、其の外歐米への輸出も増加したるは、我國對外貿易の回復と、國內の景氣擡頭の結果ならむ。而して燐寸軸木の原料なる北洋の白楊丸太も、一月の最高値を峠として漸次下落し、八月最低相場を現出して、後漸騰し越年せり。

左に相場表を月別に掲出すべし。

品名	單位	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
安全燐寸	噸	五〇・〇〇	五〇・〇〇	五〇・〇〇	五〇・〇〇	五〇・〇〇	五〇・〇〇	五〇・〇〇	五〇・〇〇	五〇・〇〇	五〇・〇〇	五〇・〇〇	五〇・〇〇
安全太軸	噸	三九・〇〇	三九・〇〇	三八・〇〇	三六・〇〇	三六・〇〇	三八・五〇	三八・五〇	三八・三〇	三八・〇〇	三八・〇〇	三八・〇〇	三八・〇〇
燐寸軸木	噸	一八・五〇	一八・五〇	一七・〇〇	一六・〇〇	一六・〇〇	一五・〇〇	一四・五〇	一五・〇〇	一四・五〇	一四・五〇	一五・〇〇	一五・〇〇
太軸中品	千把	九〇・〇〇	九〇・〇〇	九〇・〇〇	九〇・〇〇	八八・〇〇	八三・〇〇	八〇・〇〇	八〇・〇〇	八五・〇〇	九〇・〇〇	八五・〇〇	八五・〇〇
ホス軸	千把	九〇・〇〇	九〇・〇〇	九〇・〇〇	九〇・〇〇	八八・〇〇	八三・〇〇	八〇・〇〇	八〇・〇〇	八五・〇〇	九〇・〇〇	八五・〇〇	八五・〇〇
中品	千把	九〇・〇〇	九〇・〇〇	九〇・〇〇	九〇・〇〇	八八・〇〇	八三・〇〇	八〇・〇〇	八〇・〇〇	八五・〇〇	九〇・〇〇	八五・〇〇	八五・〇〇
白楊丸太	百石	一三五・〇〇	一三〇・〇〇	一三五・〇〇	一四〇・〇〇	一四〇・〇〇	一四〇・〇〇	一三七・〇〇	一三五・〇〇	一三〇・〇〇	一三〇・〇〇	一三〇・〇〇	一三〇・〇〇

第十一章 氣象及潮位

第一節 氣象

當港氣象の觀測を、海洋氣象臺及神戸測候所の成績に就て見るに、大正十四年は、平年に比し、氣温一般に低く、全年の最高氣温三十四度一(八月十三日)は創立以來の極三十七度六(大正三年八月六日)より三度五下り、其最低氣温マイナス四度二(二月二十八日)は、創立以來の極マイナス五度八(大正九年二月十一日、同十二年一月二日)より一度六上れり。降水量は平年量と大差なく、昨十三年冬以來四月迄の寡雨なりしと、五月及九月の著しき多雨なりしとの異例を見たるに過ぎずして、大體順調に經過せるを知る。日照時數は概して平年より多く、風は平均して平年と等しかりしも時に暴風雨の襲來あり、彼の八月十七日の如きは其一例にして、本市海陸方面に可成の被害ありしと聞く。又九月十八日の雨量は殊の外大にして、十七日より十八日の朝に至る迄一五〇耗を越したるも、比較的風力弱かりし爲め幾分の水害ありたるに止まれり。尙冬期に入りて季節風亦卓越せし等、本年は多少異例の年柄なりき。今明治三十年以降の測候所成績による

累年平均氣象尙又大正元年以降の月別平均氣温及降水量を表示すれば左の如し。

平均氣象表 (明治三十年以降)

Table of monthly average weather data including temperature and precipitation for various directions (W, ENE, etc.) from January to December and annual averages.

備考 風速度ハ計算法改正ノ結果大正十三年以前ノモノハ其儘ニ0.7ヲ乗ジテ改算ス、

平均氣温表 (攝氏)

Table of monthly average temperature data in Celsius from January to December and annual averages.

Table of monthly average precipitation data in millimeters from January to December and annual averages for the years 1904 to 1926.

備考 大正元年ヨリ同六年迄ハ二十四回観測ノ平均大正七年以降ハ六回観測ノ平均ナリ、

平均降水量表 (耗)

Table of monthly average precipitation data in millimeters from January to December and annual averages for the years 1907 to 1927.

同七年	同八年	同九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	同十五年	平均
六・一六	六・三三	六・一九	六・二四	六・三三	六・四七	六・四九	六・五三	六・五三	六・二二
三・五五	三・六九	三・六五	三・七六	三・七一	三・八〇	三・七六	三・七六	三・五七	三・五七
二・六一	二・六三	二・五四	二・四八	二・六三	二・六七	二・七三	二・七七	二・六六	二・六六
七・〇八	七・〇七	七・〇八	七・〇七	七・〇九	七・二〇	七・四一	七・四一	七・〇九	七・〇九
二・〇八	二・二〇	二・一七	二・三五	二・三五	二・五〇	二・四〇	二・五三	二・〇〇	二・〇〇
五・〇〇	四・八七	四・九一	四・七二	四・七四	四・七〇	五・〇一	四・八九	五・〇九	五・〇九
八・三三	七・八五	八・三四	八・三三	八・三五	八・八五	九・四〇	八・八〇	八・三三	八・三三
〇・八三	一・三三	〇・九一	〇・八五	〇・七三	一・〇一	一・〇六	一・五五	〇・六七	〇・六七
七・二九	六・六二	七・三三	七・四七	七・五三	七・八四	八・三四	七・二五	七・五六	七・五六

「附」 苺藻島

第一節 苺藻島の埋築

苺藻島は兵庫運河株式會社の前後二回に亘る埋立によりて成る。其の第一回は、明治二十九年一月、運河開鑿の工を起すに當り、堀鑿より生ずる土砂を以て運河海口百間内外に横はる淺瀬を埋築して、運河出入船舶に益すると共に、船舶運航上の危険を除くに基因す。即ち同年五月公有水面埋立を出願し、八月其の許可を得、東尻池村、西尻池村境界線上、陸地を距る八十三間の地點より沖合に於て、東方五十二間半、西方九十七間半、幅平均十九間四分の海面二千九百七十六坪餘の埋築を起工し、同三十一年四月竣功せり。此の埋立は海底下層幅四間、上層幅二間半、各厚三尺の二重沈床を、干潮面に倣ひ沈下し、石垣は面一尺二寸、控二尺五寸の切石にて、満潮面上十尺迄一割法に築き立てたるものなり。之れにより聊か附近航行船舶の安全を期し得、又運河口には新港灣を形成して、河口に碇繋する船舶は日々其の多きを加ふるに至れり。然れ共偶々風波の兆あれば、多數船舶は嶼蔭に避難輻輳し、屢々狹隘を感ずるを以て、同社は一層の安全を期せん

が爲め、更に第二回の埋立を企畫す、之れ該島東方長五十二間幅平均三十二間及其の南方へ幅九間、長百三十間、其の面積三千二百十八坪の海面埋立にして、三十二年十一月其の筋の許可を得、三十三年一月此の擴張工事を竣功せり。

以上二回の埋立總面積六千九百九十四坪、其の總工費約拾貳萬貳千六百圓にして、運河口及其の附近の海面は安全なる錨地となり、小型汽船及帆船の碇泊に便益する頗る大なるものあり。爾來同島は運河の附屬土地として、會社の所有に屬せしが、大正八年十二月本市が運河買收のとき、同島西部二千五百坪を合せ得たり。

第二節 苺藻島運河開設概要

大正十四年五月十二日申請の苺藻島運河並公有水面埋立は總工費百四拾六萬九千六百七圓にして、其の計畫の理由及工事の概要を述べれば左の如し。

苺藻島は運河西入口前面約八十三間の處に位して、風浪を防ぎ、運河出入船舶の享くる便益頗る多大なるものありしが、本市々有地西方は、常に波浪撃衝し、數度の護岸修築も其の効尠く、遂に數年前殆んど崩壊し、其の陸地の大半を失ひ一

方崩壊土砂に漂砂を加へて寄洲を生じ、尻池村陸岸と接續して、丁字形半島を形成したるにより、神戸及内海地方と兵庫方面間を航行する船舶の運航上に不便且危険不尠のみならず、西部方面間との舟筏の航行は全く阻止さるゝに至れり尙此處に船溜を現出し、大小無數の船舶雜然碇泊せり。然るに一方、入津船舶の神戸及内海地方と兵庫方面間を航行するもの、日を追ふて益々増加し、過去數年の統計の示す所によるも、大正十三年運河入津船舶參萬六千七百八拾貳隻は、同九年より同十三年に至る五ヶ年平均數參萬五千四百四拾隻に比して、千參百四拾貳隻の激増を示し、更に同方面に蝟集する筏の數を加算するときは、其の數正に夥しく、又同地方の搬出吸收する貨物量も年平均拾六、七萬噸、價額壹千萬圓を下らざるを見ても、其取引の殷盛なるを想ふべきなり。而も是等出入貨物船の多くは、常に同島の東端を迂廻して、帆檣林立せる狹隘なる水面を縫ひ、辛うじて入津せざるべからざるの現狀なるを以て、其の不便且危険なる事眞に言語に絶するものあり。若し夫れ一度西南の突風に遭遇することあらんか、附近沿岸を游弋する大小無數の船舶、或は岸礁に打碎かれ、或は激浪に凌はれ、其の遭難するもの年平均百數隻を越へ、沈没船亦三十隻を下らず、爲に此等の物資に影響する

損害たるや、實に莫大にして、尙人命に係る慘狀に至りては、一日も看過し得べからざる所なりとす。

されば本事業に於ては、苺藻島南岸一體に適當なる防波護岸を施行して、同島陸地の安全を期し、新湊川左岸より西方約八十二間の處に、防波堤を突出せしめて、此の地域一帯の波浪及漂砂の侵入を防ぎ、且同島寄洲を東西に横斷する新運河を開設せむとす。然らば現在運河出入船舶の航行の安全期して待つべく、且一方新運河兩岸には物揚場の設備を施し、之を共同荷揚場として使用せしむれば、附近一帯の工場及倉庫の受くる便益亦尠少なざるべく、猶附帶事業として新運河を挟みて、約壹萬四千七百參十四坪餘を埋立つるを以て、此等は工場又は倉庫用地として適切なるべく、殊に本市の如き一大工業都市に未だ適當なる石炭貯藏所なく、又揮發油石油等の危險物藏置場の設定を見ざるは、頗る遺憾とする所なりしが、本事業は埋立地外側に之を設くるの計畫なるを以て、本事業完成後の直接間接の利益、蓋し莫大なるものあるべし。

要するに本運河開設事業は苺藻島の失滅を防ぐと同時に、沿岸航行者の避難港として、將又運河の利用による西神戸の繁榮策として、公益上一日も忽諸に附

すべからざる緊急事業なりとす。其の工事の大要左の如し。

運河 新運河は苺藻島の東端より、同島及尻池地先水面を西に向ひて、現在運河の西入口に達し、更に同島寄洲を横斷して、新湊川尻に至る四百三十間、及同新湊川口より南に向ひて、百六十間、其の總延長五百九十間にして、現在運河以東の水面は、朔望干潮面下十二尺に浚渫するのみにて、現狀に止め、同運河以西は、底幅三十五間、水深は同じく朔望干潮面下十二尺を保たしめ、共に解船の航行は勿論二百噸級船舶の航行に支障なからしむ。

埋立 運河敷地を浚渫せる土砂及其の他に、現運河及新湊川間、即ち新運河の兩岸に約壹萬四千七百參拾四坪餘を、干潮面上十尺に埋立つるものとす。又本埋立地には、東西に通する五條の道路(尻池側二條、島側三條)及南北に連絡する八條(尻池側四條、島側四條)の幹支線道路を設く。幅員六間の幹線上運河敷に當る部分には、假橋を架設するものとす。

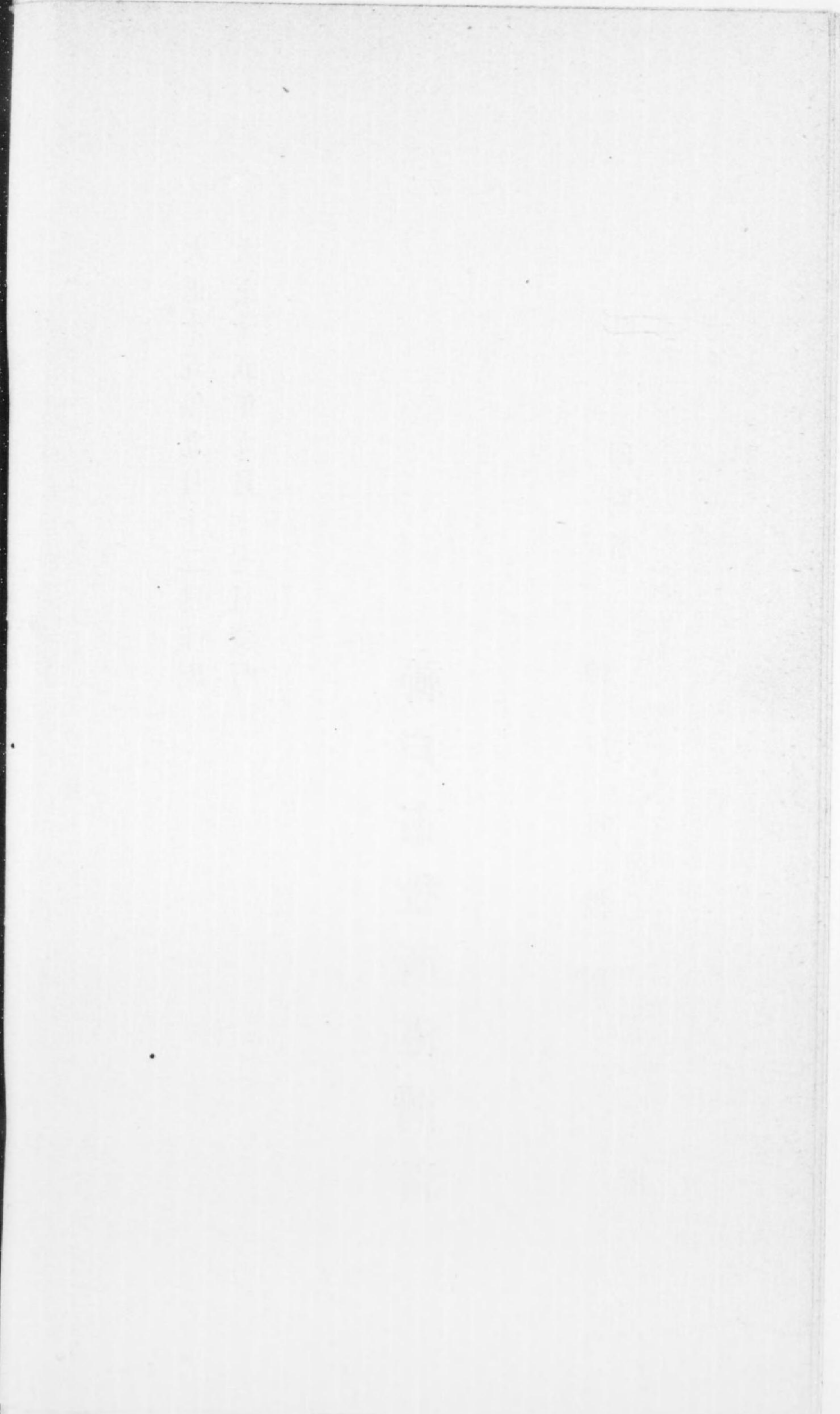
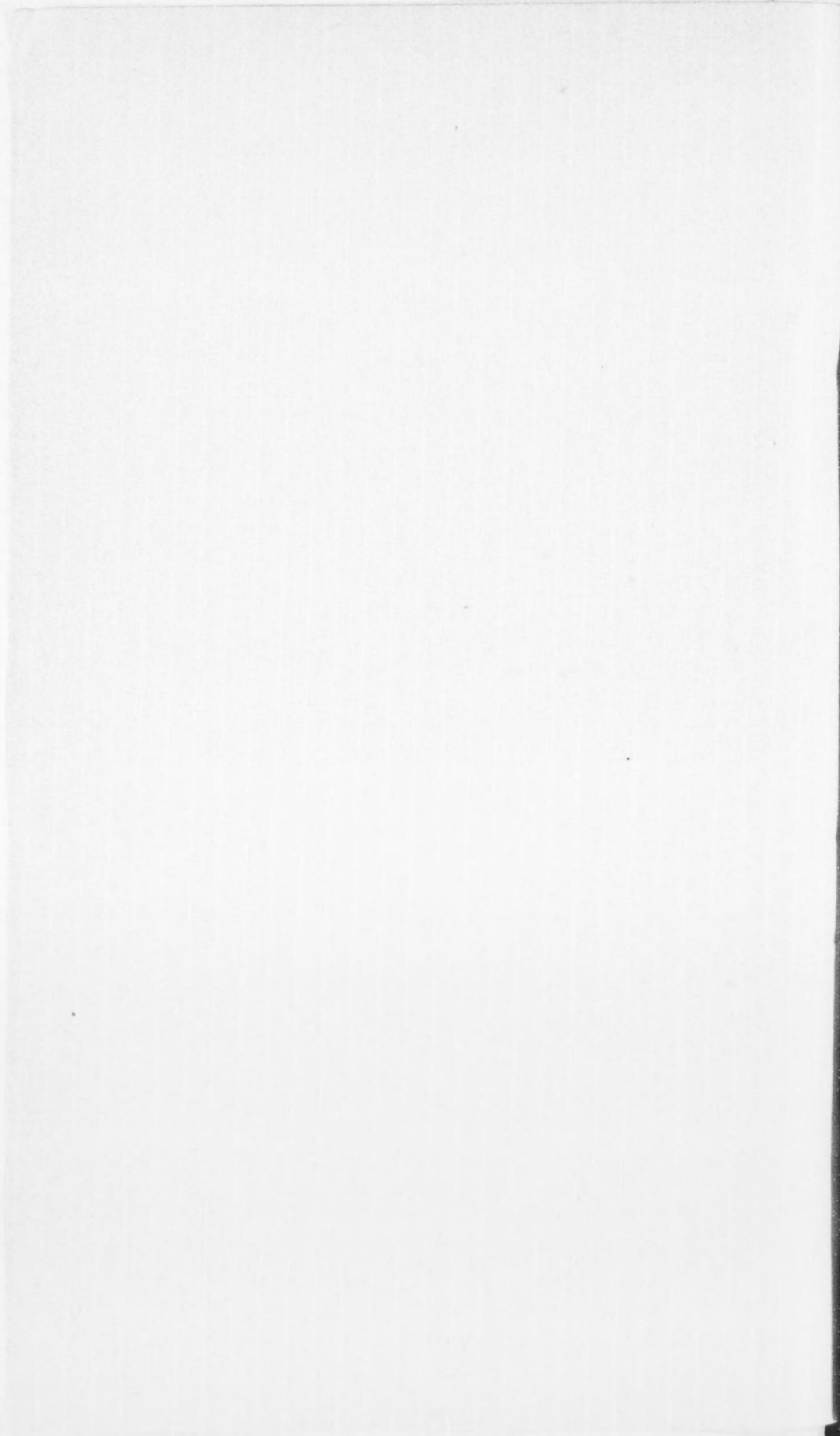
物揚場及防波護岸 物揚場は、現在運河及新湊川間新運河の兩岸に、延長五百七十二間を設け、重量貨物の荷役に適する構造とす。防波護岸は延長二百二十六間にして、波浪に耐ふべき護岸を施すものとす。

防波堤 防波堤は新湊川河口左岸より西方八十二間の地点より延長百五十七間を突出せしめ、地域内風浪の襲来による危険及漂砂の流入による埋設を防禦せしむ。

大正十五年九月十二日印刷
大正十五年九月十七日發行

神戸市役所港灣部

印刷所 神戸市役所印刷所



518

75-

終